
NARUTO～一葉の忍者～

冬野 タキジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO～一葉の忍者～

【NZコード】

N8612S

【作者名】

冬野 タキジ

【あらすじ】

晶遁という特殊なチャクラをもつて生まれてきた紅蓮は
その存在を恐れた両親に捨てられる。

そして他里に狙われないための措置として火影直々に晶遁の使用禁止

が出されており扱う忍術は簡単な忍術と体術のみでアカデミーでは
おちこぼれだつた。

しかし、そこへもう一人のおちこぼれだつたオレンジ色のやんちゃな
「ナルト」という少年と出会い。閉ざしていた心を開いていくので

ある。

アニメオリジナルストーリー限定で晶遁使いのキャラクター
紅蓮の幼少期を木の葉の忍に置き換えた二次創作です。
この小説にはオリキャラ、独自解釈が存在します。
それを了承の上でお願いします。

アドバイス、感想お待ちしています。

登場人物紹介

登場人物紹介

主人公

名前 夕凪

紅蓮

年齢 9

性別 女性

階級 下忍

晶遁のという特殊なチャクラをもつて生まれてきた子。

極めて稀な特異体質だつたため迫害を恐れた両親は幼き紅蓮を捨て出て行ってしまう。

見つけた今の養父母が「夕凪 紅蓮」と名付けたのである。

特異体質を持つ忍は何かと他里からの標的になるため火影直々の命令で使用制限が出ていたためアカデミーでは体術に力を入れている。

第十一班メンバー

名前 うちは ライガ

年齢 7

性別 男性

階級 下忍

今は無きうちは一族の生き残りの一人。この歳写輪眼を開眼させアカデミーでは同じ一族出身の

サスケとトップを争うほどの実力の持ち主。サスケとは不仲・・

名前 薦松 ソウマ

年齢 9

性別 男性

年齢 9

性別 男性

階級下忍

日々鍛錬を忘れない熱い情熱の持ち主。何事にも前向きで紅蓮たちをリードしている。

反面傷つきやすいところが玉にキズ。

＼＼＼＼

担当上忍

名前白鷺 ヒナミ

年齢？？

性別女性

階級上忍

第十一班担当の先生。暗部からの配属となつた。

普段は優しいが怒ると髪が立ち豹変するとの噂がある。得意忍術は火遁である。

登場人物紹介（後書き）

未熟物ですがよろしくお願ひします。

第一巻 2人の落ちこぼれ忍者

キーンコーンカーンコーン・・・

授業の始まりのチャイムがアカデミーの広い校庭に響き渡った。

だが、一人だけ授業をサボり用具倉庫の陰に隠れて落ち込んでいる一人のアカデミー生がいた。

少女の名は夕凪 紅蓮といった。表情はうつむいていて暗く、力無さそうに

もたれかかっている。紅蓮はすべてが嫌になっていた。

卒業試験まで後2ヶ月をきり最近は卒業試験への復習として今まで習ってきた術の

練習・そして習得した技を駆使したアカデミー生同士の手合わせの授業が多くなってきた。

紅蓮は唯一得意な体術でも女の子といふこともありどうしても男子との力の差がはつきりして

いつも勝てずにいた。そして、友達など一人もいなかつた。。

紅蓮は晶遁のチャクラをもつて生まれてきた特異体質であった。だが、生まれたと同時に特異体質という事を知った実の両親は迫害されることを恐れ

幼き紅蓮を残し出行ってしまったのである。

火影も特異体質の子は他里から狙われやすいためアカデミーに対し晶遁のチャクラは使わせぬよう命令を下していた。これを破ると厳しい処罰が待っていたため体術と基本の術しか

習えなかつたのである。

卒業間近となると優秀な子は火遁、水遁、風遁などの忍術を扱える子が一人、二人とでてくる。

その子達は飛び級であがつて来た子達が多い。紅蓮にとつてその子たちはうらやましかつた。

＝＝＝＝＝

さつきの時間でも私は一人だけ分身の術ができなくて大恥をかいてしまつた。

周りの笑つている子達が憎い・・・。

私だつてみんなと同じに忍術を使いたいのに・・・周りの大人達は私には教えようとしない。。

ねえ、なんで神様は私をこんな風に生んでしまつたの？？？晶遁なんかなければ・・・。

ただただ自分を恨むだけであつた。そう思つとこみ上げてくるものがありまたうつむいた。

どこから、ともなく足音が聞こえてきた。どうせ私を探しているイルカ先生に違ひない。。

なんともないよう気にしないでいたが、だんだんその足音が早くなつてきた。

そして、私の前にとまつた。どうせまた怒られるんだ。

だが、聞こえてきたのはいつものイルカ先生の声ではなくでかくやんちゃな声だつた。

「なあなあ、そこで何してんだつてばよ！」

聞きなれない声にハツと私は顔を上げた。

視界に入つてきた子はオレンジがかつた黄色い髪をしていて額にはゴーグルをつけている

見慣れない男の子だった。

「あなた・・誰？」

思わず聞いてしまった。

「俺の名前はうづまきナルト…将来火影になる男だつてばよ。ところでお前そこに座つて何してんだ？」

ナルト！？聞いたことない名前だ。確か隣のクラスのそのような名前の男の子がいたはずだが

うる覚えだった。

「ちよつと考え方してただよ。あなたこそ授業サボつてなにしてんの？？」

今度は私が逆に聞いてみた。ナルトは顔をひきつらせた。

「だつて授業うけてたつてつまんねーもん。俺みんなこいつでけねーしや・・

その声には私と同じ暗い思いが縮こまつっていた。

「やつか・・私もだよ。どうせみんなの前で恥かくだけだし。」

「ぬおつーお前もかー…じゃあさじゅあさ先生から隠れられる場所しつてるから一緒にこない？」

怒られるのやだろ？」

またもや明るくなつた。感情の移り変わりが激しい子らしいが…怒られてまた呼び出し食らうつよつはマシと考えナルトのこの言葉に同調した。

「いいよ。案内して。」

「んじや、決まりだ！ついてこー！」

そういうつてナルトはいい終わるなり私のことなんてかまわざ走り出

した。

「ちょっと、待つてよおーー！」

私の声も彼には届かずナルトはなりふり構わない。

「早くこい！先生にみつかるつてばよ。」

その言葉に挑発されて私は走る速度をあげた。だけどまだナルトには追いつかない。

やがて、ナルトは走るのをやめ私の方を向いて笑ってきた。
私は最後の力を振り絞ってナルトのところまでいった。笑顔が憎たらしかつたが。

「こいが俺の隠れ家だつてばよーーこなら先生にもみつかりびらーし秘密の特訓もできるしなー！」

私が連れてこられたナルトの隠れ家はアカデミー校舎の裏に広がる雑木林の開けた場所で

周りは木々に囲まれた隠れ家にはうつてつけの場所であった。

「そういうや、お前の名前聞いてなかつたな。なんていうんだ？」
ナルトは目を大きくさせていってきた。

「そりいえば、まだだつたわね。私はBクラスの夕凪 紅蓮。」

「紅蓮か・・お前良い名前してんなーー！」

驚いた。私の名前を良いだなんて言つてくれる人初めてだ。
この子・・変わってるけどいいところもあるんだ。
「ありがとうね」と口には出せなかつたが心の中でそう思つた。

この出会いから私のアカデミーでの生活は変わっていくことになる。

第一巻 2人の落ちこぼれ忍者（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

まだ文章、文字が乱雑で読みにくいくらいもあると思います。
未熟者ですがよろしくお願ひします。

第一卷 2人の秘密

倉庫の裏で出会ったナルトといつ少年に連れられて今私はナルトのいう通称『隠れ家』にいる。

木々の隙間から吹いてくるそよ風が気持ちよく、葉の間からもれる木漏れ日がちよつとよくあたつていてなんとも幻想的な風景を演出している。

それにもしても、なんでこんなところナルトは知っていたのかと思い唐突にナルトに質問してみた。

「ナルト君、なんでこんな所知つてたの？ 私今までこのアカデミーにこんな安らげる場所あるなんて知らなかつた。」

アカデミーの敷地は広くて校舎を挟み表に広い校庭を持ち裏にまた広い雑木林をもつていて
周りの住宅地とは大きな柵によつて区切られてゐる。

「俺つてばさ何回も授業サボつてるからアカデミーの敷地内のならどこでもいつたんだ。
んでもつて、ここを見つけたつてこと。」

「なるほどね・・・でもさそんなに授業サボつてると卒業できないわよ。私だつてそんなにサボつてる訳じやないけど、こんな窮屈な場所早く卒業したいし。」

私が言い終えたとたんナルトは顔つきを悪くした。

今さつきいったことの中にナルトを傷つける言葉なんてあつただろ

うか・・

「俺なんかどうせまた卒業できないからいいんだってばよ。」

卒業できない！？それはどういうことだらうか・・・

「なんで？早く卒業して下忍になつて認めてもらおうとは思わないの？」

ナルトはこきなり私の方を向いて「こゝに剣幕でいつてきた。

「誰も俺のことなんてはなつから認めてなんかいねえ！……俺だつてみんなに認めてもらいたくて

努力したけど全然だめだつた。。。ここのせいいで俺ばっか避けられるんだつてばよ！？」

「こいつって・・何？」

「こ」の訳のわからねえ。封印のせいだ！――

ナルトはそういうとお腹に刻まれている封印をみせてきた。私はそれを何がなんだか分からぬまま田をこらしてみた。

「俺の中に封印してある九尾とかこいつやつでみんな俺のこと避けてやがんだ！」

バケモノよばわりしやがつて・・俺つてば何もしてないのに・・どうせお前だつて

俺のことなんて Bieber でもつて思つてんだう？」

ナルトはそういうと涙を流していた。

九尾の言葉を聴いたとたん・・私の脳裏をよぎつた。

そうだ・・この子九尾の人柱力のナルトってこの子だったのね。この子も生まれつきの能力で苦しんでたなんて。

「まつて・・それは違うわ。私もナルト君と同じなの。」

「お・同じだつて? 嘘つけそりやつて同情をよそつて裏切るつもりだな? ?」

ナルトは今までの負の経験で人を信じられなくなっているようだ。

「本当にホントなの・・だつて私も――」

晶遁の事はもちろん口外無用とされている。私の心中で闇と光がうずまいた。

だけど迷つてる場合ではなかつた。私はどうなつたつていい・・

ただ同じ境遇の子を救いたい気持ちが私を動かした。

火影のじいさま・・すいません。

「なんだつてばよ?」

「ナルト君と同じ、特異体質で生まれてきてしまつたの。私だつて周りの大人達から本当の自分を見てもうえなかつたから。ナルト君の気持ち痛いほど分かる。」

それをきいて・・ナルトは少し驚愕した表情を浮かべていた。
それもそのハズだらう、私自身のことなんてこれまで一回も話したことなんてないから。

「私ね。晶遁つていう特殊チャクラを持つてゐる。だけど百眼や写輪眼のよつな血縁限界みたいに他里から狙われないようにつて晶遁のチャクラの使用を制限をせってきたの。だから体術だけしかないからだんだんとみんなにおいてけぼりにされて友達なんていなかつたの。」

だからね。ナルト君を助けたいんだ。」

今話せることすべてを打ち明かした。それを聴いたナルトが
「お・お前もだつたのか・。俺つてば今まで一人だけって思つてき
たけど。同じ思いを
してきた奴がいるなんて・・俺自身が間違つてたばよ。」

「だから、お願い。友達になつてくれる?」

私は目から出て来る涙を拭つていつた。

ナルトはまたあの元気いっぱいの笑顔をみせてくれた。

「もちろんだ!・!もうお互いのことが分かり合えた時から俺たち友
達だ!」

そして私の口は無意識のうちに

「あ・ありがとう!・!・!」

といつていた。唯一伝えられなかつた言葉がでた。いつのまにか涙
は嬉し涙に變つていた。

「バーか!泣いてるなよ!・!・!」

笑いながらいつてきた。

その時うじろからイルカ先生の怒号が聞こえてきた。

「いひあー・お前達そこで何してんだあー!・!戻つてこい。」

「ヤベツ!見つかっちまつた!紅蓮逃げるつてばよ!・!・!」

「了解。」

その日初めて私に友達ができた。名前は「ナルト」

第三卷 卒業試験前編（前書き）

まず、読者の皆様更新が遅れてしまつて申し訳ありません。

模試、中間とテスト続きでパソコンにも触れない日々が続いてしまいました・・。

更新頻度は一週間に1、2度程度になりますが今後ともよろしくお願いします。

あの日ナルトと出会ってから時間は刻一刻とながれていつてもう一ヶ月が経とうとしている。

隠れ家でナルト君に出会って以来私達は卒業という事を自覚して授業をサボることはなくなつたし
そして何より放課後に2人だけの秘密の特訓つてやつをやつてきたんだ。

最初はタイヤ引きとか「ぐく一般的なものだけどいつもは怒つてばかりいるイルカ先生も
氣を掛けてくださつて「補習」つてことで特訓に付き合つてくれた。

そのおかげか前よりもパワーもまして体術は男の子にもひけをとらないくらいになつたし
ナルト君と私が一番苦手だつた『分身の術』もイルカ先生が丁寧に教えてくれて

なんとか卒業試験前までにはマスターできるようになつた。
だけど何よりも一番の思い出は特訓の後にイルカ先生のおじりで行つた。

ラーメン一樂で3人で笑いあつて食べたラーメンかな・・・？

そしていよいよ運命の卒業試験の日がやつて來た。

今私は卒業試験会場の控え室にいる。Aクラスの子達が今やつてまもなく私たちの番という事だ。

一人づつ試験が行われる教室にいつてうまくできればその場で忍びの証となる

木の葉のマークが刻まれた額あてがもらえる。

今年の試験は例年と同じく分身の術であった。私達も特訓のおかげでマスターしているから自信はある。だけど落ちたらどうしようか…っていう不安もあるから

心臓はさつきからバクバクで緊張の真っ只中だ。ナルト君はじクラスだったから

私が最初に結果を出さないといけなくなる。

そうやつている間も時間はながれていき……

ガララ・・・ふいに控え室のドアがあき試験監督の先生が私の名前を呼ぶ。

「次！ 夕凪 紅蓮。」

「は・・ハイツ」

緊張のせいか声が裏返ってしまった。だけど恐れることなんてなんでもなかつた。

そして、私は試験が行われる教室へと入つた。

そこには審査役のイルカ先生ともう一人ミズキ先生がいた。深い沈黙が漂つていた。

「夕凪 紅蓮。これより試験を開始する。はじめ！…」

イルカ先生のどでかい声が教室にこだました。

それと同時に私は目をつむつてチャクラを集中させて印を結び始める…

今までやつてきた事を信じればいいんだ。

第三卷 卒業試験前編（後書き）

本当は一気に書き上げたかったのですが時間の都合により
途中半端などいりで申し訳ござりません。近日中には卒業試験を
完成させます。。。

卒業シーンは原作とは少し異なりオリジナル観点にします。

第四卷 卒業試験後編（前書き）

やはり完結させないで終わらせるのはどうかもどうかしかったので
すぐ更新することにしました。。。

とにかく一つ思ったことなのですが・・アカデミーの分身の術は補
助忍術だが
実際に忍術になると「水晶分身」になるのか・・・。
といつても作者はまったくの無知なのでwiki参照にしてしまつ
悲しいものです。

卒業試験とは一発試験なもので一回失敗してしまつたら次といふ事はなく

そこで不合格とされまたアカデミーに戻されることになる。

恐ろしいのはその場で合否が決まつてしまつことだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

忍びになるには術の発動時間も重要になつてくる。

一進一退の戦場では自分はおろか仲間の命まで危険に晒してしまつ。

この試験ではその事も入つていて。

印を結び終えすぐさま最大限にまで練つてていたチャクラを一気に解放する。

私は目をカツと見開き

「分身の術！……」

途端に私の周りにボンッといつ音が鳴つた。この時点では横を向けなかつた。

しかし、いつものじつりの手応えは確かにあつた。

おやおやおやの横を向いてみると・・・

なんとそこには綺麗に私の残像となる分身体がいたのであつた。それを見ていたイルカ先生は険しい表情から一気に笑顔に変わり

「夕凪 紅蓮。合格！……おめでとう……これで君は晴れて忍となつ

た。

これからも抜かりなく頑張るよ！」

この言葉を聴いた途端。私の心の闇が一瞬にして晴れた気がした。

「ほ・・ホントですか？」

まだ目の前に起こっていることが理解できない私は聞き返してしまつた。

「ああ。これが合格の証の額あてだ。」

イルカ先生は机にきちんと並べてあつた憧れだつた額あてを私の手にしつかりと渡してくれたんだ。

それと同時に私は本当に合格を確信したのである。まぎれもなく私の掌にあるのは額あてだ。

いつきに今までの気持ちが弾けた。

「あ・・ありがとうございます。」みんな笑つてゐる。そして私の顔も自然と笑みになつてゐた。

努力は裏切らなかつた。

時間も昼夜に差し掛かつた頃すべての試験が終わつた。

今アカデミー前の運動場には卒業を喜ぶ子供とお母さんでいっぱいであつた。

「俺、お父さんみたいな忍になるよーー。」

「さすが、私の子だわ。」

所々から感嘆の声が聞こえてくる。だが私はその中にはいなかつた。記憶は残つてないけど幼い頃に実の両親に捨てられて今のお母さん、お父さんすなわち

養父母に育てられているけどただでさえ貧乏な家だから畠仕事でこられないのである。

生きていくためには仕方のないことだ。でも一人だけ卒業とこ喜ばしいことを祝つてもられないのも寂しかつた。

しばらく木にもたれかかってあたりを見回していると見覚えのある人影が見えた。

黄色の頭にオレンジ色の服まぎれもなくその人はナルトであつた。

ナルトは私を探しているようだつた。無論彼にも両親はいない。

「ナルト君！ うひうひうひ！」

私の声に気づいたのかナルト君は私を見つけるとすぐさまよつてきた。

その手にはしっかりと顎あてが握られていた。ナルト君も無事合格できただんだ。

「紅蓮。お前も合格できたのか！」

「ええ。ナルト君も無事合格できたんだね。」

「特訓の成果とイルカ先生の教えが役立つたってばよーこれで俺も忍び認めてもらえたんだ。」

「でも。本当に厳しいのはこれからよね。」

「そんなこと昔から分かつてゐるつてばよ！俺の情熱は誰にでも負けねえからな。」

「そうね。私も負けられない。お互い頑張りましょう」

「うん！アカデミーで教わったことは忘れないつてばよ。」

私達は心の底から笑いあつて互いの合格を祝福した。同じ境遇同士で心の内を分かりあつた仲なのだから喜びは倍であった。そしてナルト君は拳を強く掲げ

「んで持つて火影になつてやるつてばよーーーー！」

第五巻 すべての始まり

「私とナルト君は無事卒業試験を終えて無事アカデミーを卒業する」とができた

こうして今、説明会の会場にいるわけだ。

下忍となつた喜びとこれから待ち受ける忍としての生活に不安を抱えながら出発である。

周りはみんなこれからのことなんかなりふり構わず友達とのおしゃべりに没頭しており
無邪気に笑いあつてゐる。

私だけこんなに緊張していいのだろうか?なんて思いつつ唯一親友と呼べる人

ナルト君はといつとれつかからピンク色の髪をした女の子に夢中である。

名は確か春野サクラといったか・・何もナルトと同じクラスだったらしいが私には

面識がない。そしてそのサクラを挟んで紺色の淡い服にうちは一族のマークをきている
すこいフレッシュな男の子・・そう今年ルーキーとして里中に名を馳せている

うちはサスケである。

あの歳で既に「輪眼を開眼させておりアカデミーでの成績はN.O.」
ドベだつた私達からすれば憧れの存在でもある。

それから何やらサクラに猛烈アピールをしてゐるナルト君である

が彼女はさつきからサスケの方ばかり向いている。

アカデミー。・。でしかもルックスもいいから女の子達からはモテモテらしいが私のタイプではないなあ・。

そして一番見たくないシーンを私は目にしてしまった。

それはサスケを不快に思ったのかナルト君は机の上にのつていた時だつた。

しばらく間近で睨み合つていたまではよかつたが突然後ろの生徒が故意ではなさそうだが

ナルト君の背中に手をあててしまつてナルト君は押し出されるサスケの唇へストライク・・。

そうキスを見てしまつたのである。しかも女の子達の前で・・・一瞬私も目をふさいでしまつた。だが目の前には取り返しのつかない光景。・。

そしてナルト君は女の子達によつてフルボッコにされてしまつたのはいうまでもない。

と不安な気を紛らわせつづけると教室のドアが開きアカデミーの先生のイルカ先生を筆頭に

今期生の担当上忍となる先生方がズラリと入つてきた。一瞬にして賑やかだつた教室が

静まりかえつた。

その先生達の中で一際視線を集めている人といえば額あてで左目を隠している銀髪の先生。

そんな中でイルカ先生が教壇の中央にたつて喋り始めた

「今日から君達は、めでたく一人前の忍者となつたわけだが・・しかしまだまだ新米の下忍

本當は大変なのはこれだらけだ

ついで、そぞろに紅茶を注ぎ、和室の中央に立つ。そのまゝに、イルカ先生が

スリーマンセル

の班を作り各班ごとに一人づつ担当の上忍の先生がつきその先生の指導のもと任務をこなしていくことになる

忍びの世界とはアカデミーとは全然違う里のために任務をこなし死
亡率も格段と高くなる
厳しい世界なのだ。一步間違えれば全滅という最悪の事態にもなり
かねないのである。
そう、ここからはもう年齢なんて関係のない。。。。

そんな不安を脳裏に抱かせながら私達はそれぞれのスタートラインへといくのである。

三人一組か・・誰といつたい私はなるのだろうか。

「班は力のバランスが均等となるよう」ついで決めておいた。」

— — — — —

とじよめきが生徒達の間でまきおこつたがそんなことはお構いなし

にイルカ先生は発表を始めた・

「まず第一班 まかどホルマ・倉内ソウビン・・・」

と段々と発表のたびに歓声やどんよりとした声が響きあうなか・・

「つじや次七班！うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ！」

いい終えたとたんナルト君が立ち上がりつて

「イルカ先生！！よりによつて優秀な俺が何でこんなやつと同じ班なんだつてばよ！・！」

文句を言い始めたのだ。

でも、ナルト君きみは私と同じドベだよ・・・。相手はしかもノ・・

1ルーキー・・

あなたが言える立場じやと私が思つたとつりのことをイルカ先生は言つた。

この言葉に呼応してサスケも

「サスケは卒業生36人中一番の成績で卒業、ナルトお前は男子の中で一番のドベ！いいか！

班の力を均等にするとじぜんとこつなるんだよ！」

「まつせいぜい俺の足手まといになるなよ。ドベ！」

ナルト君もさすがに頭にきたのか・
とつくりみ合いの喧嘩になつてしまつた。

つじやあ女で一番のドベな私は優秀な生徒と！？
これはマズイ・・という新たな不安をかきたてた。

イルカ先生は見向きもせざらに続けていく。

「次、第十一班！うちはライガ、鳶松ソウマ、夕凪紅蓮。」

うちはライガだって…」の子もまたサスケ君と同じく一族の出身で惜しくも成績はN.O.・2であるが

優秀には変わりない。そして写輪眼を同じく開眼させている。これもドゲな私といれてのパワーバランスを考えたら計算はあうが。

そして鳶松ソウマに関してはまったくの無知である。どんな子なのか…

周りを見回すとライガはすぐに気がついた。サスケと同じ後ろにうちはのマークが入った服を着ている。

微動だにせずにたじつとしていた。第一印象としておとなしい。ケドどこかに隠し持つている威厳…

鳶松ソウマはビビっているのか分からなかつた。

「以上十一班…終了！」

「うじゅみんな午後から上忍の先生を紹介するからそれまで解散！…」

といつて先生達は出て行つてしまつた。

ナルト君に声をかけたかったけど收まりそうにないので一人呆然と私は教室を後にした。

先走る不安を胸に…

第五巻 すべての始まり（後書き）

やつと・・・登場人物紹介であつた鳶松ソウマ、うちはラライガの二名を

出せました！またせてしまつてすいません。

ナルトとの関係は少し減つていつてしまいますが・・・

白鷺ヒナミについては次号に登場します。

皆さんこれからもよろしくお願いします。

第六卷 担当上忍 田嶋ヒナミ（前書き）

やつと今回最後の主要人物ヒナミを登場させることができました。

読者の皆様遅くなつて本当にすいません。

アカデミー校内 資料室にて

2人の男女が何やら資料を見て話していた。

「これが今回お前が担当する忍者達だ。初めて担当するヒナミには結構厳しい面々だな・・・」

男は資料を隣のヒナミに手渡した。

「ああ、ありがとうございます。シンドウ先輩早速見させていただきます。」

「だから、むついで先輩はやめなつてもう俺達は同じ先生なんだからなつ」

「でも何か昔の名残つていうか癖でそう呼んでしまつんです。」

ヒナミは顔を赤裸々にしていった。この状況でシンドウと田線を含わせるのは

アレだったので手元の資料に目を傾けた。

その資料にはヒナミの担当する3人の忍び名前と顔写真やアカデミーからの

情報がのっていた。忍び登録書とは違つた別の重要参考書であった。

忍びの名前は上から順につちはライガ、鳶松ソウマ、夕凪紅蓮とあつた。

「つちはの[即]輪眼に熱血馬鹿として晶遁のこの子ですか・・・」

「個性あふれるメンツが揃つちまつたな。まあ暗部でも成績優秀なお前なら

やつていけると火影様は判断したんだろ。期待に応えろよ。」

「分かってますって。何かおこしたらすぐ罰直食らうの私です」

「その様子ならなんとかやつていけそうだな。それよりあの事も火影様から聞いてるんだろうな？」

「はい。特に夕凪 紅蓮つて子のことは里の機密ですし常に警戒はします。それとうちはの方も・・・」

「特に狙われやすい要素満載だからな。遠くの任務には十分気をつけるよ。

つじや俺も行かなきゃなんねえしこれでドロンー！」

「お疲れ様です。」

ヒナミも資料を手に自分の受け持つ部屋へと歩きはじめた。

ヒナミ side and

紅蓮 side

お昼を過ぎ担当上忍が始まつとしていた。

卒業生達は各班に設けられた控え室へとそれぞれ向かっていた。

その中に紅蓮もいた。ナルトとは食事を共にして互いに愚痴をこぼしあっていた。

ナルトから聞いた愚痴の中心はサスケのことばつかである。

「あいつ何なんだってばよ！いきなりあの態度・・・」などなど悪態をついていた。

そして互いの健闘を祈つて別れた。一人ともしばらく会えなくなることは一人とも分かつていたが、口にはしなかった。

広い廊下の右左にはそれぞれ暖簾に第一班から第十一班までそれぞれに控え室が設けられていた。

第十一班の部屋は一番奥の端の部屋であつた。大きく第十一班控え室と書いてあつたので分かりやすかつた。

扉に近づいてくるたび心臓がバクバクとなつてくる。ドアノブに手をかける前に今一度深呼吸をした。

だが逆に心拍は増えていくばかり・・・
「何やつてんだ自分！」と己を諭し勢いに身をまかせて勢いよくドアを開けた。

まぶしい光が私の目に入ってきた。一瞬目を閉じた。。

だがすぐに開けなおすと・・・そこには既に一人の男の子が座っていた。

一人はうちのマークが入った紺色の服をきている男の子・・・

そう紛れもないその子はうちのライガであった。

そして手前には炎をイメージした赤色の服を着た男の子
鳶松ソウマである。

初めてこのとき私達は田を合わせた。。

一番最初に声をかけてくれたのは鳶松ソウマであった。

「あなたは、夕凪紅蓮さんですね。僕は鳶松ソウマです。これから
よろしくお願ひします！」

といかにも熱血やうな感じで言つてきた。（ロック・リーみたいな
感じ？）

「よ・・よろしく。」

そのあまりの迫力に空返事しかできなかつた。

「そして、じつちの彼がアカデミーでも知れわたつていたうちはラ
イガ君です。」

いかにも内気なライガを催促するよつてソウマが紹介した。

「よろしくな。」

彼の顔には笑顔なんてなく真顔でそう短くつけ合えただけだつた。
サスケはまだ親しげがあつたが

彼は周りとの交流を拒んでいるかのよつた雰囲氣だった。

その後暫く沈黙が流れたが場の雰囲氣を和ませてくれたのはやはり
ソウマだった。

「鳶さんはそれぞれクラスも違いますし今日はじめてあつたばかり
ですが、これから
共に任務をこなしていく仲間でもあります。だから少しでもお互い

を事を知り合えるよう
自己紹介をしませんか？」

誰も異論はなかつた。

「つじや俺からで・・名前は鳶松ソウマと申します。得意な忍術は
土遁です。

好きなことは修行です。苦手はありません！」

好きなものが修行つて・・『ヤツあのロック・リーつてやつと一緒に
なんだね。

まあ少し暑苦しいけどまだ爽やかさがあるからいいんだけど・・

「つじや次は私がするね。名前は夕凪 紅蓮。得意なのは体術です。
一般的な重拳なんだけど・・

好きなことつていうか好きな言葉は『努力』苦手なのは忍術です。」

自分が晶遁という特異体質であることはいいでは避けておこう。後
で面倒なことになりかねないし・・

まあ、いつかは打ち明けなくてはならない時がくるのは承知すみだ。
それもロランク任務の間はいいがいつかは絶対使つてしまふだろう。
身を危険に晒してしまつけど・・体術だけで生きていける世界では
ないし。

最後によつやくスキンシップが苦手そつて内気な印象を漂わせてい
るライガが
重い口を開けたよつた。

「俺の名はつちはライガ、得意なのはつちはの名の『』とく火遁だ。
好きなものとか苦手なものとか特にナシ。以上だ。」

うむ。予想以上に自分のことは語りたがらないようだ。
同じ一族のサスケとはエライ違いだな。。。

両方近づけないオーラをバリバリ放つてるのは同じなんだけどね。
一通り自己紹介が終わつたつて事で場を取仕切つたのはやはりソウ
マだった。

「少しほお互いのことが分かりあえましたね。とはいってもこれ
からやつしていく仲間ですか」

あとは修行やなにかでサポートしあいましょう。」

「ああ。
「はい。」

これからやつしていくにしてもまだ初めてあつたばかりだから付け加
えられることは何もない。
ソウマ以外は・・・

それから感嘆にお互いのアカデミー時でのことに話しあつていた時
ふいにドアノブが動いたかと思うとそこには明らかにこれから
私達を担当する上忍らしき人物が入ってきた。

黒色の髪に少し茶色がかつた長い髪を垂らしており、目は青色身は
木の葉ベストをまとつている
穏やかそうな女の先生であつた。

「みんな、遅くなつてごめん。私がこれからあなた達を担当する白
鷺ヒナミつていいます。

まだ、担当するのは今年が始めてだから不便などにあるけどよ

ろしくね。」

「ハイ。」

ライガもさすがに声を張り上げていた。3人の呼吸がうまく合わさっていた、

「次にみんなに自己紹介してもらいたいんだけど・・・案内したい場所があるので
そこでしましょう。みんなついてきて。」

私達一行はとある場所へと向かった。

第六卷 惣記上巻 白壁ヒナミ（後書き）

何回も改変下さいません。。。

書き上げてしまひたかつたといひなので。。。

読みにくくて申し訳ないです。。

私達が案内された場所はアカデミー時代にも使っていた演習場であった。

何故、先生がここを選んだかは後々分かることとなつた。

「まあ、あなた達の名前はもう知りされてあるんだけど今日初めて会つたばかりってことには変わりないし左の紅蓮さんから自己紹介してください。得意なこと好きなこと将来の夢とかなんでもいいのでどうぞ。」

「あ・・えーと名前は夕凪 紅蓮といいます。好きな・・・」

言葉は『努力』なんて先生の前でなんかいえない。熱血と同じようになされるのは嫌だから。

努力=修行つて解釈されそうだし・・・

「好きなじゃなくて得意なのは重拳式体術です。将来の夢はいい忍びになることです。よろしくお願ひします。」

「ふう・・なんとか言い終えた。第一印象はこんなもんでいいだろ？」「紅蓮さんありがとう。次はお隣のソウマ君どうぞ。」

「ハイっ！――名前は鳶松ソウマです。得意なのはお父さんと同じ

士遁です。

好きなものは修行！－苦手なものはありません。将来の夢はお父さんを超えることです。」

驚いた・。熱血だけじゃなくかなりのお父さん好きなね。ってことは熱血もお父さん譲りと・。うわあ・・まるつきりロック・リーとマイト・ガイ先生みたいでただ師弟同士と親子が違うだけで中身は同じようなもんですね分かります。

「あなたのお父さんの鳶松ナリマさんは木の葉でも有名な士遁使いですもんね。

お父さんごく似ですね。」

なんていうもんだからソウマは照れ顔である。うん、やっぱ暑苦しこぞお前えーーー！

「つじや次ライガ君お願いします。」

「名前はつじはライガ。嫌いなこと好きなことは無い。昔は一族の再興であったが

今は伝統あるつじはの血を絶やさない事だ。一族を滅ぼしたアイツを許せないが

サスケみたいに殺そうなんておもつかいねえ。サスケとは違うやれだけだ。」

今まで私の中にいたライガ像をいつきに打ち壊すものだつた。うちが滅んだことには知っていたがまだライガやサスケといふ生き残りがいる限り血筋は絶えていない・。

内気な像から少し明るみと暗闇がまじった複雑な像へと変っていた。流石にヒナミモコの血口紹介に口を挟まなかつた。逆に誰もそのことを触れたくないような空氣でもあつた。

「あらがとう。これで全員の血口紹介が終わつたわね。つてことで・」

「こきなり明日からあなた達には任務をやつしてもう」「

すかさずその言葉にソウマが食らこつぐ。
早く任務がしたくてたまらないようだ。

「早速依頼されてる任務するんですか??」

「そんな訳ないわよ。明日あなた達にやつてもうのはサバイバル演習。」

「サ・・サバイバル演習ですか?」

演習なんてアカデミーでもたくさんやつてきた。やつとの思いで卒業してきたのにまたかよつ! つて最初私は軽視してしまつた。

「アカデミーでやつてるただの演習ではないのよ。みんな忍びになれたからつて浮かれているけどそれは違つ・・・。この演習を突破して初めて下忍として認められるの。アカデミーでの卒業試験はこの演習にふさわしいものを選抜するた

めのただの中間点。

今年卒業した36人からなる第十一班のうち合格できるのはわずか三分の一の四班だけ。

そう下忍として認められるのは1-2人。あとは再びアカデミーへ戻つても「ひつ」になる。」

な・・なんだつて！？落ちたらまだアカデミーに戻る。しかも合格率は極端に少ないうえに・・

忍びとしてまだ一人前ではなかつたなんて。・・・一瞬今までやつてきたことすべてを疑つた。

あれもこれもすべてこの演習のために・・・

嫌だ。そんなの絶対！この関門は突破しないといけない。また苦しむのはお断りだ。

ライガは以前表情は変えなかつたがソウマはこれでもか・・・といふくらい落ち込んでいた。

「何落ち込んでんの。まだ終わつてないじゃない。私もあなた達を合格させてあげたいのはヤマヤマなんだけどコレも厳しい忍びの世界を生き抜いていくために必要な試験だから。

と。とにかく明日の朝またこの演習場前に集合ね。相手はモチロン担当上忍の私

実力も見る機会だから持てる忍具は一式揃えてきてね。朝飯は抜いてきたほうがいいわよ。

このプリントにすべて書いておいたから遅れないように。」

ヒナミから配られたプリントにはサバイバル演習に関する項目がズラリとならんでいた。

ソウマは配られた途端熱心に読み始め私も目を通していたがライガ

だけは違つた。

手に取つた途端ぐしゃぐしゃにしてしまつたのである。

「ら・・ライガ君大丈夫なの？」

流石に心配になつてヒナミがいつたが彼は

「問題ないです・・・」とだけ受け答えした。。

「つじや解散！」

突きつけられた現実は重かつた。

第八巻 サバイバル演習その1

翌朝・・・

今日は大事な試験・・そう忍びになれるかを賭けたサバイバル演習が始まるとしていた。

私は予定時刻より30分前に指定された第5演習場へ入った。今日は他の班でもサバイバル演習があるのか見覚えのある人たちにも何度かあつた。

みんなの顔は極度の緊張からのかひきつっていたし言葉すくなどつた。

私がついた頃には既に第5演習場には既にソウマ、ライガの2人がいた。

「あつーおはよーいぞーいます。紅蓮さん」

「おはよー。後私のことは紅蓮でいいから。だつて呼び捨てにしてもらつた方が
氣を使わなくてすむから」

我先にとソウマが話しかけてくれた。ソウマのポシェットには忍具となるクナイや手裏剣がビシツと揃っていた。

私もできる限り忍具はそろえてきたつもりだ。
ライガもあるポシェットの膨らみからするとそろえてきていたようだつた。

「やつぱつ、緊張しますね。」

「アカトリーの時の緊張何かへでもないくらいに思つてきましたよ。」

今思つとアカトリーの時の緊張は無駄に思えてならなかつた。

「ライガは？」

「俺は大丈夫だ。それより自分達の心配したらどうなんだ？」

相変わらずの俺様主義者である。まつそれもライガらしくていいんだけど・・

私は昨日配られたプリントをもう一度読み返してみた。
そこには日時、場所、用意するものだけが書いてあって具体的な演習内容に関しては記されてなかつたのである。

「どうこの演習なのか分からぬから余計に難しく思つわね。」
その言葉にソウマが反応した。

「そうですね。僕も訳が分からなくなつてお父さんにて聞いてみたんですけど・・生憎担当上忍び未経験なので分からぬそうです。だけば年によつて変るやうですよ。どんなものかは分かりませんが・・」

それほど外部にも漏らさないつてことは余程重要な試験なんだろ？。

サバイバル演習を突破した下忍の先輩たちにも口外無用つてきつち
り言われているようだし・・

すごい警戒心の高さが伺える。まあ逆にいえば簡単に情報を漏らす

よつな里は

簡単に他国に侵略されてしまつからゐる意味当然のことなのである。

それから5分程過ぎてソウマと2人で話し合つていた頃・・・
手にタイマーを持った私達の担当上忍白鷺ヒナミ先生がやつてきた。

見ると時間キツカリである。後で聞いた話なのだがナルト君の班の
担当上忍「はたけ カカシ」先生は
かなり時間にルーズならしい。

「皆、おはよ。」

「おはよ。」

「氣持ちのいい挨拶とはなつていない逆に声が小さかった。

「だいぶもう緊張しているよつね。でも緊張しているよじやこの
試験はうからないわよ。」

だからその余分な一言が逆に重圧となつて私達に降りかかる。これも一種の心理作戦か？

「つじやー2時タイマーをセッテしてつと・・・」

今はちょうど午前8時であるから試験時間は4時間つてとこりか・・・

「準備OK！サラツと今日のサバイバル演習について説明するね。
そういうとヒナミ先生はポケットに入れてあつた二つのスズを取り
出した。」

私達は異様な目でそのスズを見つめた。

「やつ今日の演習はこのスズを私から奪いとる」と、もし屋までに

スズを奪えなかつた奴は

昼飯ぬき&アカデミーへ戻つてもらうから。そして私がその昼飯をみんなの前で食べるからね。」

昨日先生が朝飯は控えたほうがいはつたのはこの事だつたのか・・・

早合点した・・・。

「それとスズは一人一つね。二つしかないから必然的に一人は落ちることになる。だからスズを取れなかつた人は全員容赦なくアカデミーへ戻つてもらうからね。」

え・・・なんだつて！？どんなに頑張つてもこの三人の中から一人は必ず落ちるつてこと？

だとしたらここにいる三人はもはやここでは仲間ではなくライバル・・・・

みんなはこの言葉をきいてどんなことを思つているのだろうか。

「手裏剣、クナイ、忍術なんでも使つていいよ。私を殺すつもりでこないと捕れないから。」

ソウマが聞き返した。

「危なくないですか？3人相手に・・・」

ヒナミは待つてましとばかりに余裕の笑顔で答えた。

「何いつてるの。君達はまだ忍びではなく候補生よ。私の心配なんかしてたら合格できないわよ。」

相手は上忍・・・能力はケタが違ひすぎる。。

「つじや説明は以上！準備はいい？」

「ハイ・・

余計に小さくなっていた。このとき私達の緊張はピークを迎えていた。

「大丈夫そうねーつじゃ始めーーー！」

スタートの命図が言い終わると同時に3人は四方へ散った。運命のサバイバル演習が始まった・

よしつ・・忍びたるもの基本は隠れるべし・・みんなうまく隠れられたようね。

ヒナミはあるノートを取り出した。それは合格判定書であった。

まず最初の欄にマルを付け加えた。

ヒナミは付け終えるとすぐさま周りが見えやすい場所へと移動した。逆に3人からは察知しやすくなってしまったがヒナミには考える必要はない事だった。

そして目を閉じ精神を集中させ五感を研ぎ澄ますし瞑想の状態に入つた。

三人のチャクラを感じ取る。

その時こちらへ向かつてクナイが投げつけられてきた。

咄嗟にポシェットからクナイをだしあじき返す。クナイがきた方向にはうちはの小僧・

ライガがいた。

「やはり最初に仕掛けってきたのはアナタによつね。ライガ君・・・」

そういう終えるとライガは思い切り木の幹をけり突撃してきた手にはクナイがしっかりと握られている。

「フンっ！ そんなの知つたことないですよ。先生！！」

「随分余裕があるわね。」

ライガは空中で戦闘態勢にはいり十分間を見計らつて手裏剣を投擲した。

しかし無惨にもあつさりと交わされてしまう。

だがライガにはその行動は予測されていた事だった。

その手裏剣の影には起爆札がつけられたクナイが混じっていたのだ。クナイが地面につくと同時に起爆札が爆発する・・・。

ヒナミはこれには不意を付かれたのか瞬身の術で間一髪逃れた。

（影手裏剣の術をクナイに応用したか・・早くも頭角を現してきたわね。うちはライガ）

地面に着地したライガはすぐさまこちらに向かつて駆けはじめた。そしてまた手裏剣を投擲する。

ヒナミはすぐにしゃがみよけた。だがしかし一瞬の隙をライガは見逃さなかつた。

ヒナミが後ろに下がつた途端瞬身の術で一気に近づきクナイを振り

かざした。

ヒナミも咄嗟にクナイをあてライガの軌道をずらしたがそれもつかの間・・

候補生とは思えぬ身体能力で蹴りに入ってきた。

だがそこは上忍である。冷静な判断で左手で蹴りを受け止めると右手のクナイを捨てパンチをする。

すごいとはいえたままだ相手は候補生・・むやみに殺傷するなどできない。

ライガも瞬時に脚を離しバックステップでこれを交わした。

「さすが噂に聞いていたけどいきなりこの状態まで持つてくるとは流石ね。

それだけは認めてあげる。」

「こなんくらいまだまだですよオ先生！！」

話をする暇なくライガはすぐに第一段階へと入っていた。

次に何をするかと思えば・・忍術の印を結び始めていたのである。。

（なつ！あの構えは・・・うちは一族に伝わる印。・まだチャクラ量が足りないはず！！）

そう思つてる暇もなく彼は候補生とは思えぬスピードで印を結び終え・

「火遁・豪火球の術！！！」

ライガの口から放たれた火炎放射はすかさずあたり一体を包み込む。

一体は焼け野原となつた。

ヒナミをとらえられるだけの範囲であった。

だが火が収まるときまでいたハズのヒナミはいなかつた。あたりを見回したがヒナミの姿はどこにもない・・・

（クソー！）に隠れやがつた！・・・

混乱するライガにヒナミの声ではなく聞きなれた声がライガを導いた。

「ライガ君後ろです！・・・」

ライガはすぐに後ろを振り返るとヒナミが拳を突きたて突進をしてきた。その距離は既に3メートルもなくすぐに行動に移せる段階ではなかった。

殴られる！・・・とライガが覚悟した瞬間・・・

「土遁・土流壁の術！・・・」

目の前の土が盛り上がりライガの前に壁をつくつた。まさに間一髪のことである。

ヒナミの拳は会えなくその壁に遮られた。

そしてライガが横を振り向くとそこにはソウマがいた。

ソウマはどうも今までの戦闘を見ていたらしく付け入る隙がなくてジーッといしていたが

ライガの危険を瞬時に読み取り駆けつけたのだ。

「た・・助かったぜ。」

「いえいえ・・・同じ仲間ですから助け合つのは当然です・・それより一人では

とても太刀打ちできません……」は一回引きました。

これには流石にライガも反論はできず、やくそくその場を立ち去った。

（いいプレーだったわね。あの行動力・加点対象だわ）
ヒナミは笑顔でまたマルをつけた。

第八巻 サバイバル演習その1（後書き）

よつやくここまで到達・・・

原作どうりのお約束展開です。

サスケと同じ行動パターンですね。

だけど戦闘描写が苦手は作者のやつは全然比べ物になりませんね。

もっと漫画読み直す必要がありますね・・・。

第九巻 サバイバル演習その2

うちはライガ side

ヒナミから十分な距離をとるためスピードを増して開始地点まで後退する。

前には先程俺を危機一髪のところで救ってくれたソウマがいる。横顔を見ると澄まし顔で前を見つめていた。

だが、俺の心の中で一つの疑問がうずまいていた。

（何故・・俺をあの時助けてくれたのか？）

スズは二つしかなく必ず一人が落ちる・・・。

ここまで来て落ちたいと思つてゐる奴はいない。みんな忍びになるために必死だ。

表向きは仲間としてもこのサバイバル演習ではライバル・・

だから俺はこんなところで立ち止まつてなんかいられず我先にと一人で仕掛けていった。

無論その時は仲間のことなど考えていなかつた。

だが、見せられた現実は上忍との格段の違い。瞬時に場を受け入れ冷静な判断で

俺のトラップを見切りやがつた。うちはの奥義火遁・豪火球の術もあつさり交わされた。

あのまま俺がやられていればチャクラはそう残つてなかつたし次の行動へ移すのには時間がかかつたであろう。

なのに何で助けてくれたのか？その答えはどんなに考えても見つか

らない。

頭が混乱しそうになりソウマに対する感謝の心が薄れていったため思わず聞いてしまった。

「お前・・なんであの時俺を助けた? あのまま俺がやられていればお前達のズズを取れる確立はあがつただろう・・」

突然の質問にソウマは一瞬顔を驚かせたがすぐに冷静な口調で答えた。

「ああ・・その事ですか。最初に言われたサバイバル演習の内容を考えてみたんです。

ライガ君が対峙しあつてるときに・・そしたら一つの矛盾が出てきたんですよ。」

「矛盾・・? そんなものがこの演習にあるのか? コレは大事な試験・

・ 生徒達に何か隠している事でも分かつたのか?」

思いがけぬ言葉であった。矛盾とはいつたまでも何のことであろうか。ヒナミがいつていた説明に怪しい部分などなかつたハズだ。

「その話は後です。それよりもまだ時間はあります。早く紅蓮に合流して作戦を練りましょう。

あの戦闘を紅蓮は見ていたようです。俺達の会話も耳にはいつていることでしょうから

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

それから少しして木々に囲まれた中から紅蓮の姿が見えた。紅蓮は俺たちの姿を見ると安心したような素振りを見せていっしつへ

駆け寄ってきた。

だがその目には涙がうかんでいた。

「私ライガ君とヒナミ先生の戦闘みててレベルが違いすぎるって思つたの。

みんなのように忍術扱えないし・・・私に合格する事は無理つて思つたわ。

体術でも差が違すぎる・・・もう分からなくなつて・・・」

しかしソウマが笑顔をみせて歩み寄つた。

「そんな事はみんな分かっています。ライガ君でさえ上忍には歯がたたないんですから

一人で仕掛けたつて返り討ちにあうだけなんです。ですが一つだけ話があります。

みんなで合格できる方法が。」

「3人? そんな事あるわけない。最高でも2人までだぞ?」

ライガは顔をしかめていった。確かにスズが二つ・・・必然的に

一人が落ちることになるわけなのだが。

「違うんです。だから今から話す内容を聞いてくれませんか?それを聞いて納得のいかないようだったらもう何もいいませんので。」

聞いてみる他に選択肢はない。仲間を信じじることもチームワークを形成するのだから。

「分かった。聞いてやるよ。お前に恩もあるしな。」

「私もいいよ。」

2人とも素直に快諾してくれた。

「つでその話とやらを聞かせてくれ。」

そして私達はしゃがんで円を作つてソウマが回りに聞こえない程度の囁き声で説明しはじめた。

「皆さんは最初の段階で相手の心理作戦にハマッていたんですね。」

「心理作戦? 何のことだ。」

ライガと紅蓮の頭の中にハテナマークが浮かぶ。

「ハイ。一番おかしいと思ったのがスズが二つしかないってことです。

それっておかしいと思いませんか?」

「おかしいだつて?」

「よく今までのことを考えてください。任務で活躍している下忍の先輩達はどこも担当上忍をいれた
4人1組フォーマンセルで活動スリーマンセルしています。ですが担当上忍と下忍2人の3人1組はみたことないですよね?」
確かに・・今までみてきた中に3人1組スリーマンセルで活動しているところは見たことがない。

アカデミーで教わった木の葉の条例でも暗部や上忍、中忍での特殊な任務を除いては
下忍には必ず担当上忍を入れて4人1組フォーマンセルで活動しなければならないと決められている。

「ここまで来ればもう分かりましたか?」

ソウマが逆に質問を投げかけた。

するとライガが分かつた! というように顔を輝かせた。

流石はアカデミーのルーキー頭の回転は早い。

「なるほどな・・そういう事か。ソウマお前よく考えたな。」

あのライガが関心したようにソウマを見た。

紅蓮にはこの状況がわかっていない。

「ありがとうございます。じゃあ紅蓮に説明しますね・」

「あつ・・うん。」めんバカで

「いいんですよ。この目的はスズをとるのではなく3人のチームワークを見るためのテスト

だと思います。」

ライガもうなずいている。一体なんのこと??

「あのスズは仲間割れを起させるためのもの、一人でいたつて
上忍とは力の差がありすぎて

スズに触るのがやつとです。でも3人で行ってチームワークの良さ
を見せ付ければ

大丈夫でしょう。」

第十巻 サバイバル演習その3

チームワーク・・それは基本的に集団で行動する忍び達にとってはなくてはならないもの。チームワークを大切にしなければ自分はおろか仲間

までも危険にさらしかねないことになる。

そう考へてみるとチームワークといつものがいかに大切なものが伺えてくる。

アカデミーでも忍びについていろいろなことを学んできた。だから、こんなところで仲間割れだとおこしていたら元も子もないのかもしれない。

この班でもし合格できたら・・

ソウマの言つていることは正しいと思つ。

だから私達はその考へに賛同をした。

「やうと考へれば次は作戦ですね。どうしましようか・・・

作戦となるいろんなパターンを練る必要になる・・・

無論私にはそんな事考へられる頭は無い。

だが作戦を練るのにさほど時間はからなかつた。

すでにライガの中では具体的な構想が出来上がつていたらしいから・

「俺にいい案がある・・・」

「おつ流石ライガ君。聞かせてくださいませんか?」

一人ともライガに耳を傾ける。

「それはだな・・・」

ライガが淡々と次から次へと話していく。

そしてその話し合いと合わせて・・私は自分の秘密を喋ってしまった。

晶遁のことについて・・

二人ははじめ啞然としたが、すぐに私のことを受け入れてくれた。
二人ともありがとう・・・。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

今・・私はライガの作戦を遂行すべく先生のもとへと向かっている。
体術に一番自信があるといわれた私はなんと斬り込みを任せられた。
私の仕事は体術で相手の気を引かせてライガ達の後方支援班に繋げ
ることである。

残りの二人はそれぞれの配置へ既に向かっている。

後は私が気を見計らつて最初にしかければいい。

しばらくするとライガ君とヒナミ先生が対峙しあつていた開けている場所に

ヒナミ先生は本をだし休息にひたつていた。

私はその姿をみると十分に間合いをとつて後ろへと回る。

あの状況からしてまだ私の姿には気づいていない。
よしよし、上出来だ。

無事木々に身を隠しながら絶好の場所に陣取った。

「こないうち後ろをとつやすくもつてこいの場所だらう。
あたりを見回すと一人も無事きづかれずにそれぞれの配置へついた
ようだ。

私は目をこらしての作戦の指揮をするライガへ向かってOKサイン
をだした。

ライガは腕を上から下に振るジョスチャーがかえってきた。
おそれくGOサインだらう・・・私はまじろOKサインをだして・・・
ポションからままず手裏剣を取り出す。

手裏剣を握る私の手は小刻みに震えている。
緊張している・・・でも今までだつてこいつつ窮地はだつしてきた。

もう一度気持ちを高く持つて深呼吸をする。
すると少し緊張がほぐれた。

そして手裏剣をしっかりと握り締め・・・

ヒナミ先生へ狙いを定める。大丈夫・ゆっくり集中すればできる。
次の瞬間私は手裏剣をヒナミ先生へと投擲した。

うまく軌道にのつてヒナミ先生の後ろをついてくる。

だがしかし、そこは上忍といつもの・・すぐに身の危険を察知してクナイを持ちはじき返した。

それと同時に私は木の幹を思い切り蹴つてヒナミ先生へ突撃を開始する。

「今度はあなたね。いいわ相手してあげる。」

互いにクナイで応戦する。

上忍の体術はスピードは速く威力もある。だけど私だって負けていな！

なんとか相手のクナイに食らいついて対処をする。

カキン、カキン・・・

金属音がこの広大な演習場に響く・・・。

「私の動きについてこられるとは中々のものね。」

「いえいえ、私はまだまだです！」

褒めの言葉を聞けたのは嬉しいが今の状況では素直に喜べない。

このまま至近距離でクナイで戦いあっていたのではうちがあかないのでは

私は第二段階へはいった。

先生が真横から振りかざしてきたクナイを刃をあてるのではなくギリギリでよけると守りの浅い足元へ一発まわし蹴りをした。

先生はまたもや冷静な判断でバックステップで私の蹴りをかわし後ろへ着地しようとする。

だが・・それは作戦通りであった。

ヒナミが着地した瞬間・・

「土遁・心中斬首の術！！！」

突如真下の地面からソウマの手がでてきてヒナミの脚を掴み一気にヒナミを土中へと引き込む・・・

一瞬不意を突かれたヒナミはよろめいたが・

「その程度じゃ まだまだね。 変わり身の術！」
ヒナミの体は瞬時に木の太い幹へと変っていた。

「クソッ・・・」ソウマは舌打ちをついた。

私も急いでソウマのもとへ駆けつけ土中からでようとしているソウマに手を貸した。

それについてライガも私達のもとへやつってきた。

「二人ともよく動いてたぜ。」

「まだまだよ。」

「俺も肝心なところで失敗してしまいました。」

「でもここへこたれてる暇はないぜ・・・・。 次がラストプレイだな。」

「分かつた。・・・」

「ハイ。」

3人で待っていると・・・ヒナミがどこからともなく目の前に現れた。

「あなた達・・・よく考えているわ。すでにアカデミー生ではないく
らいにね。

でももう時間がない・・・。このままだと全員アカデミーに戻っても

らうわ。」

ヒナミはまたもや搔きぶつをかけてきた。

だがもはやそれにのつかる私達は既にいない。逆に自信満々である。

（どうやら・・・この試験の本当の目的を分かり始めてきたようね。
あの連鎖も
十分だったし。仲間意識もしっかりとなっているわ。）

第十一巻 サバイバル演習その4（前書き）

ソウマにとあるチートフラグ発生・・・かも・・・既に2回ほど技を使っていますがまだまだ下忍にしては余裕がある設定になつております。

第十一巻 サバイバル演習その4

今までにも十分上忍との力の差はしらしめられてきた。さつきの戦法だってそう・・・つまに眞面目に絶妙のタイミングでかわされてしまった。

もし私だったらよける時間すら考えられず足をつかまれて晒し首になつたであろう。

私達はもう一度木々の中に隠れ最後の作戦となろう戦法を練つた。

ライガは既に別の案も考えていたらしく・・・話はすぐにまとまつた。

「これでラストチャンスだ。時間がない。何が何でもスズをとるが。」

その言葉からは・・最初にあつた頃と威圧感というものは消えており逆にライガの仲間思いが感じられた。

「俺が今度は仕掛け役になる。紅蓮は俺の補佐として一緒についてくれ。

ソウマはさつきと同じで・・土中に潜り合間をみて心中斬首の術を頼む。」

「だけど・・また変わり身の術やなんかで・・・かわされてしまうんじや。。」

「大丈夫だ。おいちょつと耳をかせ・・」

そう言われてソウマはライガに耳をかした。

あまりに小さい声なので私には聞こえなかつた。

そしてライガが耳を話すとソウマは顔を驚かせてなるほどいう
関心した態度を見せた。

「え・・何々?」

私も思わずしりたくなつて聞き返したがソウマは後になれば分かる
といつて
教えてくれなかつた。

ソウマは一人準備のため消えていつてしまつた。

私はライガのサポート役として手裏剣などの投擲をすることとなつた
ライガも一応クナイはもつてゐるが何をするかは分からぬ。

そして・・私達はもう一度ヒナミ先生のところへ向かつた。
先生は今度は場所を変えて西に向かつてゐることだつた。

途中木の幹をつたつてゐる私たちに背後から一人近づいてくる者が
いた。

「ライガ君・・後ろから誰か近づいてきてるような気配がするんだ
けど。」

誰かな?」

無論先生ではない誰か

「近づいてくればわかる。大丈夫敵ではない。」

またもや詳しいことは聞けなかつた。

仕方なく・・待つてゐると驚いた。

正体はなんとソウマであった。

「え・・ソウマは確かに別行動なんじゃ。」

紛れもない・・田の前にいるのはソウマだが

「あいつはソウマの分身体だ。本物のソウマはあっちにいる。」

その言葉を聞いてピンときた。

今回の作戦はあたかも3人で突撃してくると見せかけ、隙があいたところを

ソウマの一撃で先生を止める・・という戦法らしい。

だからって先に教えてくれればよかつたのに・・後で見れば分かるとは

私の反応を楽しんでいたのであろうか。

結局ライガと私、そしてソウマの砂分身体を引き連れて向かうことになった。

ソウマの分身体も私と同じ投擲役である。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

白鷺ヒナミside・・

先程から彼らのプレーには驚くものが沢山ある。

わっさのも忍となつての任務としても十分に有効な手だてであろう。

ライガがどうやら陣頭にたつて指揮しているらしい。

ソウマもあの歳で数々の土遁が扱えており

ドベである紅蓮もある位の体術技量があれば対等に戦える。

問題はライガであるが・・候補生離れした身体能力、判断力・・

そして技術力はすでに下忍離れしている。

最初は予想通り一人でつかかってきたが今ではチームワークを率先して唱えているんだろう。

初めて担当する班員にしては中々おもしろい班になるかもしれない。

そう思つてゐる間にも彼らが近づいてきている。

人数は足音からして3人・・か・・

まだ彼らの姿は見えないがすぐに北の方向からクナイと手裏剣のおりまざつて投擲されてきた。

このくらいの量なら上忍にしてはまだ序の口程度である。わきめもふらぬ速さで一本のくないですべてをはじき返した。

すぐに彼らの姿が見えてきた。どうやら紅蓮とソウマがサポート役にまわつており

ライガを援護しているらしい。

まもなく第一陣がやつてきた紅蓮が手裏剣・・・ソウマがクナイを投げてくる。

しかし・・ヒナミにはそれは因でライガがはじき返しているだけを見計らつて

瞬身の術で一気に近づき体術戦にもつてくるというパターンを思い描いていた。

だがそれは違つたのである。印を結ぶないなやライガは思いもよら

ぬ術をだしてきた・・・

「忍法・・・手裏剣影分身の術!」

忍術レベルでもAランクに位置する・・高等忍術・・・

放された手裏剣は分身を繰り返しやがて多数の手裏剣へと变成了。そして第一陣と混じつて更に多数のクナイ、手裏剣が一ちらへ向かつてきている。

「つな・・あんな術まで・・・使えるとわ・・やはり想像以上に何かをもつていてる。」

（あの数はさすがに防ぎきれてもその間にやられただけね。）の子達相手に忍術は使いたくなかったけどしょうがない・・・使わざるをえない。）

ヒナミはすべての印を結び追え・・忍術を出した。

「水遁・水陣壁の術!」

ヒナミの前にあらわされた水の壁が現れ無惨にクナイ、手裏剣は一瞬にはじきかえされてしまった。

そして予想通りにライガがこちらに向かつて突進していく。その目には・・写輪眼が宿っていた。

こんなところで・・高等忍術を見せられて更に写輪眼とは・・

ヒナミは瞬身の術で合間を見よつとしたが体術・幻術・忍術をすべてを見抜く

写輪眼の前では動きが事前に察知されてしまう。

そのため先周りされてしまった。

既にクナイがかまえられている。

有無をいわさず・・そのまま体術戦へ・・・

だが・・少々危険が伴う・・写輪眼の前では次の行動が読み取られてしまう。

ヒナミにも初体験のことであった。

なんといつにとか・・上忍が下忍相手におされている。

ライガはきちんとヒナミの急所を狙つて来ている。

ヒナミはそれを防ぐのに手一杯であった。さらにも・・後ろから紅蓮達のクナイが更に飛んできている。

ライガの一撃を間一髪で交わしヒナミは即座に忍術を使つた。候補生相手といえどここまでされてしまつたらとんでもない。今ここで瞬身の術を使つても先回りされてしまう。

「紅蓮・・交わせ！・・・」

ライガがすかさず叫んだ。

「写輪眼相手とは言え・・ごめんなさいね。水遁・水球弾の術！・・

本来よりかは抑え目であるが・・十分威力はある。

ライガのそこまでは予想していなかつたのであらう。踏み込んでおり身動きが取れないでいた。

だがまたもやライガ達の目の前の土が盛り上がつた。

「土遁・土流壁の術！」

水球は土の壁と衝突し・・両者とも崩れ去った。
そして土中より・・ソウマの姿が現れた。

後ろにいたはずのソウマはその瞬間とかれ砂へと帰った。
あちらに気を引かせて・またもや心中斬首へともつてこりつといつ
作戦だつたが

仲間の危険を目の前にして出でてきたといつ魂胆であった。

「先生・・一步間違えたら危なかつたですよー。」

「『めんなさいね・・。』[写輪眼相手には初めてだつたものだ
から
本気になつてしまつたわ。だけど土の中にあなたがいた事は分かつ
ていた。

危険になつたらまた出でくるんだらうなつてのは分かつていたわ。」

「氣づかれてたんですね。それでのタイミングでの術を・・・

「怪我はさせたくない・・・せめてもの配慮よ。」

とわいってもヒナミ自身も相当追い込まれていた。

分かつていたとしてもあのタイミングでなければやられていた。

そしてライガは[写輪眼を解いて紅蓮とともにやつてきた。

「写輪眼・・あまり使いたくなかったのですが。スズを本気でとる
ため
使つてしましました。」

「何いつているの。殺すつもりでこいつていたのは私よ。別に気にしてはいなーいわ。」

そして・・

ジリリリリリリリリリリリリ・・・・・

試験終了を告げるタイマーが鳴った。
そしてヒナミは笑いながら

「おめでとう。あなた達は合格よ！」

だが彼ら3人は既に本当の目的を分かっていた。

「あら・・既に気づかれてたか。まああの連携をみれば分かってたわ。」

一瞬の沈黙を挟んで紅蓮が言葉をだした。

「やっぱソウマのいつたとおりだつたね。」

「ああ、そうだな。」

どつと笑いがこぼれた。みんな心の底から笑っている。
私も忍びになつた喜びがふつふつとわいて來た。

「あ・・あとみんな明日から早速本当の任務をやつてもらうわ。
木の葉任務受理所の前で待つていてね！これで私はドロン・・
といつてすぐにヒナミ先生はいつてしまつた。

だけど。喜びはまだ続いた。

「ライガ君はやつぱりす」いや・・・。

「俺の力だけじゃない。お前らの頑張りもだ。」

「そうね。3人で勝ち取った「合格」だね。」

いつまでも感嘆の声は・・演習場に響いていた。

第十一巻 忍びとなつて

難関といわれたサバイバル演習を突破し晴れて忍びとなつた
うちはライガ、鳶松ソウマ、夕凪紅蓮の所属する第十一班は担当上
忍の白鷺ヒナミの元

忍びとしての活動をスタートさせていた。

最初の内は下忍レベルであるDランク任務が主であった。

その内容は迷子の猫の搜索から子守、清掃など木の葉の住民からよ
せられた

依頼が多い。なので実際に敵と戦うことなんていつのまに無い。

忍びとなつたばかりの下忍には面倒くさい事だと思われガチであるが
いきなり忍びになつた子達を常に危険がつきまとつて いる里外には
出せないのである。

まだ仲間意識も浅く実戦経験も少ないためだ。

Dランクで下積みさせるのは任務の重さを体感させるためでもある。
だがDランクや班での修行の状況をみて担当上忍の承認のもとでC
ランク任務

つまり中忍レベルの任務を請け負う事もできた。

CランクはDランクとは違い里外からの任務もある。

多少危険は伴うが貴重な実戦経験となる。

忍びとなつて早一ヶ月の月日が流れた。アカデミーとは違ひ早朝から任務にて夜遅くに帰る毎口である。

おかげで筋肉痛に苦しんでいたわけなのだが・・

朝に弱かつた私は最初のうちは度々待ち合わせ時間に遅れてしまい怒られることもしばしばあつたが一ヶ月もたつと大分慣れた。最近は重労働の任務が多いいため体のあちこちが痛い。

普段使つていな筋肉を使つトレーニングの意味合ひもこめられているようだが

任務を無事終わらせることが一番の目的であつてそんな事は全然考えていいる暇はなかつた。

まあそのおかげで体力がついてきて体術に磨きがかかつってきたのでよかつた。

また今日も朝6：00集合であつた。朝早くに家を出てまた眠りから覚めぬ

木の葉の町を歩く。

日中や夜は活気にあふれている木の葉の大通りは人もまだまばらで開いている店は一、二軒程である。

しばらく中心街を歩いていると炎をイメージした赤い服を着て額あてをしている

子にあつた。そつその子は紛れもなく私と一緒に第十一班に所属し士遁を得意としている

鳶松ソウマであった。

服はある色じゃないのか一発で分かった。

私が駆け足で近づいていくとその足音で向こうも気づいたのかこちらを振り返った。

「おはよう。」

「あつ紅蓮おはよう。」

「活動の時以外であつのは初めてだよね。」

「ああ・・そういうえばそうだね。」

それはいつも私が待ち合せ場所に行くとライガとソウマの二人は対外先に来ていた。

私の家が一番遠いからっていうのもあるが一番は朝に弱いことと女の子が故に寝ぐせ直しなどを入念にやつてしまつて出るのが遅くなってしまうからかな。

ともあれ、今日もいつもどおりに出てきたのだがソウマがこの時間にいるって事はソウマの少しばかり今日は遅くでてきたんだろう。だけど理由はあえて聞かないことにした。

「とにかく、ソウマの家はこの辺なの?」

「せうだよ。だって僕の家はお父さんが武器屋やつていてるから商店街のすぐ近くなんだ。」

「えつ。ソウマの家つて武器屋だつたんだ。。」

「ハイ。お父さんの作る忍具は木の葉でも有名だからね。質が良いつて評判なんだよ。」

へえ～初めて知つた。ソウマの家が武器屋だつたなんて・・ソウマの父鶯松ナリマさんは木の葉でも有名な土遁使いとして有名である。

今は引退して隠居していると聞いてたが武器屋を開いて鍛冶士になつていたとはオドロキである。

「あつ今度お父さんに頼んで作つてもういましょうか？同じ班員だつたら多分

喜んで作ってくれると思ひます。」

「でもいいの？逆に迷惑なんじやない？」

「いえいえ、そんな事は全然ないよ。」

確かに・・私の今の忍具は切れ味がちょっと落ちてきいた。

そろそろ買え時と思つていたところだがわざわざ私のために作つてもうつのは

いせわか遠慮したいものであつたがソウマの好意を踏みこじるのも逆に良くないと思つて半ば不安はあつたが承諾した。

鶯松武器は刃こぼれしにくくて長持ちな上品質が良いため木の葉の忍びは好んで買つてゐるのだ。

その一つも木の葉の忍びの強さになつてゐるかも・・・。

そつこにうしてゐる内にいつもの待ち合せ場所となつてゐる
木の葉の中心街からちよつと離れたところにある公園がもうすぐそ
こに来ていた。

そこには既にライガの姿があった。

「ねえねえ。ライガってソウマより早く來てるの?」

「うん。いつも僕よりか先に来ています。30分前にきたときも既
にいましたし・・・」

「うわ・どんだけ早くきてるんだか。」

「まあ彼らしくていいんぢやないですか。人一倍任務に熱心なのラ
イガだし。」

「それもそうだね。」

やがて公園の前までたどりついた。

「おはよう。」

「おはよう。」

私達の声に気づいたのかライガは後ろを振り向いた。

「ん・お前らか。一人でくるなんて珍しいもんだな。」

「大通りでばつたりあつちやつてね。」

「ナウソウ。結構ソウマの事聞けたし。」

「ソウマの事?」

ライガは不思議そうに聞き返してくるもんだから私達が話していたこと一通りいった。

ソウマの家が木の葉で有名な武器屋な事だったことはライガも知らなかつたらしい。。。

第十二巻 Cランク任務～波の国へ～序章

こうやって3人で話していると打ち解けていなかつた最初の頃の自分がなんだが恥ずかしく思えてきた。

最初は何でも自分のことを話したがらなかつたライガも自然と私達の話にものつてくれるようになったしソウマはもつと話したがるようになった。ている。

意外とこの班でならつまくやつていけるかも・・

そう思つていたときに丁度私達にCランク任務の話がヒナミから出てきたのである。

いつものように時間キッカリきたヒナミ・・そこまではよかつたのだがその手元にはなにやらプリントがはいつたケースを持っていたのである。

挨拶の後ヒナミが早速そのプリントを見ながら詳細を説明した。

「えーと今日から皆にほひランク任務をやってもらひことになつた。Dランクの出来やあなた達個人の技能を判断して火影様と話し合つて決ましたよ。」「Cランク任務！？」

その言葉を聞いて一瞬驚いた。

他のソウマたちも同じ事を考えてそつたがソウマもつ一度聞

き返していた。

「Dランク任務つて・・確かに中忍レベルじゃないんですか?僕達下忍がやつていいんでしょうか?」

「木の葉の決まりではある一定以上のDランク任務をこなしかつ担当上忍が班員それぞれの技能を判断した上で承認の元受けられる事になつてゐる。勿論近場で簡単な任務だけどあなた達には里外に出てもらう任務よ。その分は私もみんなのバッ克アップをするから。」

それを聞くと私達の忍びとしての活動が認められた上に労働となつていたDランク任務から開放された気分になれた。だが簡単とはいえ少々危険が伴つ・・少しだけ不安もある。

「みんな納得してくれたようね。それじゃ早速任務について説明するわ。

今回あなたたちがうける任務は波の国への護衛任務よ。」

「波の国?ですか・・

波の国とは初めて聞く国であるどこのにあるのかさえ全く分からなかつた。

第十四巻 ～波の国～第一章（前書き）

波の国の位置が曖昧模糊になつております。
どなたか知つている方がおりましたらお願ひします。

第十四卷 ～波の国～第一章

私達は担当上忍であるヒナミから波の国について説明を受けた。

波の国・・それは木の葉隠れの里、通称火の国より遠く離れた海上の島々にある

隠れ里を持たない小国である。隠れ里を持つていなため忍びとう者はなく

影と呼ばれる人物もいない。逆に島国なめ他国から干渉がうけにくく忍びをもつ必要がない

というのが一番の理由である。

そのため大名が国を統治しているらしいがその大名でさえもお金をもっていないという

貧国だそうだ。依頼をするのにもお金がかかるためお金の無い波の国からの依頼は極端に少なく

また木の葉の忍びも実際に波の国に行くことは滅多にないため火の国での認知度も低いらしい。

一瞬、金がないのなら依頼できないんじゃないの?と思つたがそれより先は大人の事情つてものがあるので触れないでおいた。

今回の任務地となる波の国の知識もつけたところで私達は早速依頼人のまつ

任務受理所の建物内に入った。

建物の中に入ると受付の者である木の葉ベストを来た男が一人私達

の姿を見ると

事前に心得ていたように近寄ってきた。そしてヒナミに向かつて話しかけた。

「ヒナミさんお待ちしておりました。依頼人様はもうそちらの待合室で待機されておられます・・・」

「分かつたわ。ありがとう。」

受付員はハイと小言で応えると自分の持ち場へと戻つていった。

私達はそのまますぐ隣の待合室へと通された。

中に入ると依頼人と思われる人物が私達を待つていた。

まだ朝が早いため同じ待合室の中には私達と依頼人以外は無論ない。

い。

依頼人は顔立ちがすつきりとしていて額には大工さんらしい布を巻いており

目は澄み切つた青々としていて歳も私達とかわらないくらいな青年であつた。

依頼人は律儀な人で私達を見るなり一礼をした。

いきなりされるものだつたから戸惑つたがヒナミが挨拶するのを続けて私達も挨拶をした。

その後ヒナミがまず口を開いた。

「こちらが今回の依頼人のウルマさんよ。波の国で大工をされる方なの。」

見た目でもまだ15、6の少年であるがその歳でもう大工として仕事をしているらしい。

「今回依頼させていただいた比良 ウルマです。皆さん波の国までの護衛よろしくお願ひします。」

丁寧で落ち着いた口調でウルマはいった。

いざ、依頼人を前にすると緊張のは当然だ。なにせ護衛というのだからこつちは

依頼人の命を預かっているということになる。見ると三人とも顔がひきつっていた。

心臓はバクバクである。

そんな3人を見て諭すようにヒナミが言った。

「いえいえ、この子達も里外の任務は初めてですので緊張している部分もありますが

技能は他の同年代の忍びより秀でていますので、安心ください。」

「そりなんですか。それは助かります。」

ウルマはそれを聞いて安心したように胸をなでおろしたがライガ、ソウマ、紅蓮の三人は依然打ち解けてないでいた。

その後10分ほどヒナミが任務について簡単な質問をした後最後に私達3人に向かって言い放った。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だから。緊張していると行動に支障をきたすことになるし動搖を生むことになる事はアカデミーでもう学習済でしょ。

そうと決まればすぐに荷造りをしてきてちょうだい。15分後木の葉の正門前に集合ね。」

そういう終えるとヒナミはウルマとともに去つていつてしまつた。残された私達は一路それぞれの家へと戻ることになった。

戻る途中にライガが話し掛けってきた。ライガは一はやく現実を受け入れ

私達を和ますかのような口調で言つてきた。

「いきなりあんな事いわれたんじゃたまつたもん無いけどこれもまた忍びとしての任務だしある意味で仕事だ。」

絶対こなしてみせような。」

その言葉を聞いて今までの不安が少しずつ和らいでいった。

「ハイツ」

「そうね。」

またいつもの3人に戻っていた。「緊張していては何も始まらない」

・
アカデミーでぐどいほどいっていたイルカ先生の言葉が脳裏をよぎつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8612s/>

NARUTO～一葉の忍者～

2011年7月14日01時54分発行